

# 平安期中央語の言語類型

—活格性の有無—

山 田 昌 裕

## Linguistic Typology of the Heian Period

— Existence of Characteristic of Active Language —

Masahiro Yamada

### 要旨

本稿では、無助詞名詞の外項内項と述語との間の介在成分に質的な違いが認められることから、平安期の日本語が格活性を有しているという竹内(2012)の主張に対して検証をおこなった。結果としては、外項内項と述語との間の介在成分に質的な違いは見られず、また格標示という点からも平安期の中央語は対格型であると結論付けることができた。

一方で、実態として外項が内項より述語との距離が離れる傾向にあることは確認される。それが外項内項という統語的性質によるものでないとするれば、何に基づく言語現象なのかについても考察した。同じ内項であっても有生名詞主語が無生名詞主語より述語との距離が離れる傾向にあること、介在成分として比較的長い引用句が許容されるのは有生名詞主語の場合であることなどから、外項と述語との距離が遠くなることを許容する要因として、主語の有生性が関わっていることを明らかにした。有生名詞は話題になりやすく、そこに視点が定まったまま情報伝達がなされるので、無助詞であっても情報伝達上の支障はなく、ある程度の介在成分が許容されるものと思われる。このような背景が有生名詞において存在することによって、有生名詞主語と述語との距離が遠くなる傾向が実態として言語現象に表れていると結論付けた。

キーワード：無助詞名詞、外項内項、活格型、対格型、有生性

*Key Words* : Non-Particle Noun, External Argument and Internal Argument, Active Language, Accusative Language, An Animacy

## 1. はじめに

古代日本語を対象とした言語類型的研究では、柳田（2007、2014）、Yanagida & Whitman（2009）、竹内（2008、2012）、菊田（2012）などの論考がある。柳田（2007、2014）、Yanagida & Whitman（2009）、竹内（2008、2012）では、上代日本語に活格性を認め、それに対して菊田（2012）は特にYanagida & Whitman（2009）の問題点について述べており、日本語の格活性の有無に関しては、まだ結論に至っていないと思われる。

一方、竹内（2012）では『土佐日記』『大和物語』を資料として平安期（10世紀）の中央語に関して、次のような言語类型的分析をしている。

無助詞の〈動作主〉主語は大きく述語から離れられるのに対し、無助詞の〈対象〉主語と無助詞の他動詞文の目的語は〈動作主〉主語ほど述語から離れられないことが明らかになった。そうであるならば、古代日本語の主節では、項構造上の外項、内項の区別が、節中の他の要素に対する振る舞いにおいて保持されており、活格性を有している（下線は稿者、以下同じ）との特徴づけが成り立つ。すなわち、古代日本語の主節の無助詞名詞句は意味役割によってその振る舞いが決定されていると考えられる。

本稿では、平安期の中央語が活格性を有しているという言及に対して、検証をおこない、その上で、平安期中央語の言語類型について考察したい。以下、2節では竹内（2012）の問題点を指摘し、3節では平安期中央語における格配置の実態を確認したうえで、言語類型について考察する。4節では外項と述語との距離、内項と述語との距離、その違いが何によるものなのかについて考察する。

## 2. 分析方法の問題点

### 2.1 理論と分析方法の確認

竹内 (2012) は、無助詞名詞と述語との間に、どのような成分が介在しているかという条件によってその距離を測り、その距離の遠近によって外項と内項の区別が保持されているという考え方である。

まずは外項内項から確認しておこう。影山 (1993) では、外項内項について、以下のように記述されている。

項構造に現れる動作主 (Agent) や対象 (Theme) といった項は対等の資格で並列されるのではなく、或る種の階層関係で示される。本書では項構造の内部を ( ) と < > を用いて区別し、< > の中に表示された項を内項 (internal argument)、その外側に表示された項を外項 (external argument) という。—— (中略) —— 内項は動詞の近くに位置し、外項は動詞から離れている。 (p. 47)

と述べた上で次のような図を示している。

- a. 他動詞：(Agent <Theme>)
- b. 非能格自動詞：(Agent < >)
- c. 非対格自動詞：( <Theme>)

他動詞の目的語と非対格自動詞の主語である (Theme) は、文の構造上、述語の近くに位置する。文のより中核、内側に位置しており、これを内項という。他動詞文の主語と非能格自動詞文の主語である (Agent) は、文の構造上、内項を包み込むような形で述語から離れて位置する。いわば文のより外側に位置しており、これを外項という。

そして外項と内項をそれぞれ別の形式で表示する言語を、言語類的には活格型と称するわけである。例えば、もし日本語が、「太郎 (外項) が割る」「太郎 (外項) が歩く」のように外項を「ガ」によって表示し、「コップ (内項) を割る」「コップ (内項) を割れる」のように内項を「ヲ」によって表示する言語であったとすれば、日本語は活格型と分類されるわけである。

太郎 (外項) コップ (内項) 割る (他動詞)  
太郎 (外項) コップ 歩く (非能格自動詞)  
コップ (内項) 割れる (非対格自動詞)

上記のように、「ガ」「ヲ」などの標示形式が顕在化する場合には、その言語を典型的に分類できるが、平安期においては、「ガ」や「ヲ」が標示されない場合が多い（特に現代日本語のような主語表示「ガ」はまだ存在しない）。そこで竹内（2012）は、外項内項と述語との間の介在成分によって、外項内項と述語との距離を定め、その距離によって外項内項の区別が存在すると認めることで、平安期の日本語に活格性が存在すると主張しているわけである。

竹内（2012）では、他動詞文の主語と行為性の自動詞文の主語を一括して〈動作主〉主語、非行為性の自動詞文の主語を〈対象〉主語としているが、上記の非能格自動詞が行為性の自動詞、非対格自動詞が非行為性の自動詞に相当すると考えられる。

## 2.2 実例による検証

竹内（2012）では①～③のような例を示し、〈動作主〉主語（外項）と述語との間には、テ節（継起、理由）、ド節、主節の時を表す語などが介在するが、〈対象〉主語や他動詞目的語（合わせて内項）と述語との間には、これらの成分は介在しないという。

- ① 今宵、船君、例の病おこりて、いたく悩む（『土佐日記』 p. 50）
- ② 藤原のときざね、船路なれど馬のはなむけす（『土佐日記』 p. 16）
- ③ また、としこ、雨の降りける夜、千兼を待ちけり（『大和物語』 p. 298）

しかしながら平安期（10世紀）の散文には、④～⑨のように〈対象〉主語と述語との間に（④⑤⑥）、また他動詞目的語と述語との間に（⑦⑧⑨）テ節、ド節や主節の時を表す語が介在する例は見られる<sup>1)</sup>。ただし僅少ではある。

- ④ 翁、今年は五十ばかりなりけれども、物思ひには、かた時になむ、老い  
になりにけると見ゆ (『竹取物語』 p. 67)
- ⑤ このことば、何とにはなけれども、ものいふやうにぞ聞こえたる  
 (『土佐日記』 p. 36)
- ⑥ 見えたりし人、そのままに、八月二十余日まで見えず  
 (『蜻蛉日記』 p. 316)
- ⑦ 火鼠の皮衣、からうじて人をいだして求めて奉る (『竹取物語』 p. 38)
- ⑧ この歌よしとにはあらねど、げに、と思ひて、人々忘れず  
 (『土佐日記』 p. 28)
- ⑨ 屏風の絵、ことどもいと多かれど、書かず (『落窪物語』 p. 271)

また、従属節においてもテ節が確認できる(竹内(2012)では、理由を明らかにしていないが、主節のみを分析対象としている)。

- ⑩ おなじ女に、陸奥の国の守にて死にし藤原のさねきがよみておこせたり  
 ける。病いとおもくしておこたりたるころなり (『大和物語』 p. 340)

④～⑩はいずれも、テ節、下節や主節の時を表す語が〈対象〉主語・他動詞目的語(内項)と述語との間には介在しないという竹内(2012)の主張を否定するものである。すなわち、無助詞名詞と述語との間に介在する成分によって、述語との距離が離れているかどうかを判定するという分析法には問題があることを示唆する。

また竹内(2012)は、ヲ標示目的語と他動詞述語の間に介在する成分と、無助詞目的語と述語の間に介在する成分に違いがあると主張する。⑪⑫のように、ヲ標示目的語と述語との間にはト節や〈動作主〉主語が介在するが、無助詞目的語と述語との間には介在しないという。このことによって無助詞目的語と述語との距離が近いことを示そうとしているものと思われる。

- ⑪ いとわりなう苦しと思ひ惑ふを、いといみじと見る(『蜻蛉日記』 p. 140)
- ⑫ 扇どもも、をかしきを、そのころは人々持たり (『紫式部日記』 p. 127)

しかし、⑬～⑱に示すように、無助詞目的語と述語との間にト節が介在す



ところが無助詞名詞となると、それが主語なのか目的語なのかは述語との対応から判断する必要があり、述語との間に多くの成分を挟み込むことは情報伝達上の支障につながる。だからこそ無助詞目的語と述語との距離を極力離さないようにする必要がある。無助詞目的語と述語との距離の近さは、平安期の日本語の格活性を示唆するものではなく、情報伝達上の支障を軽減するための措置であったと考えられる。

以上見たように、〈動作主〉主語（外項）と述語との間に介在する成分と、〈対象〉主語・他動詞目的語（内項）と述語との間に介在する成分には違いが見られず、無助詞名詞と述語との距離を、その間に介在する成分によって測るという方法には問題があると思われる。

### 3. 平安期中央語の言語類型

前章では、外項内項と述語との間の介在成分によって距離を測るということは妥当ではなく、またその距離は外項内項という統語的性質によるものではないということを確認した。つまり平安期の中央語に活格性が認められるかどうかは判明しないということになる。そこでここでは改めて格標示という観点から考察したい。

そもそも言語類型は、いわゆる主語や目的語に相当する名詞がどのような格でマークされているかによって分類するものである。現代日本語は他動詞主語、自動詞主語が「ガ」でマークされ、他動詞目的語が「ヲ」でマークされるタイプで対格型とされる（【図1】参照）。先に示したように、他動詞主語、非能格（行為性）自動詞主語が「ガ」でマークされ、他動詞目的語、非対格（非行為性）自動詞主語が「ヲ」でマークされていれば活格型となる（【図2】参照）。

【図1】 太郎（外項） コップ（内項） 割る（他動詞）

太郎（外項） <input type="checkbox"/>	歩く（非能格自動詞）
コップ（内項） <input type="checkbox"/>	割れる（非対格自動詞）

【図2】 太郎（外項） コップ（内項） 割る（他動詞）

太郎（外項） <input type="checkbox"/>	歩く（非能格自動詞）
コップ（内項） <input type="checkbox"/>	割れる（非対格自動詞）

それでは平安期の中央語において主語、目的語がどのようにマークされているであろうか。平安期の主節においては、現代日本語のような主語表示「ガ」はまだ存在しておらず、主語は無助詞である（以下、助詞がない場合を「 $\phi$ 」で示す）。一方、対象表示の「ヲ」は存在するものの、他動詞目的語が「 $\phi$ 」の場合も多くみられる。ちなみに今回調査した資料の他動詞目的語における「ヲ」の標示は1310例、「 $\phi$ 」は1370例であり、「ヲ」の標示率は48.9%となっている。およそ半数が「 $\phi$ 」ということになる。この状態を反映させて平安期中央語の格配置（alignment）を考えると、対格型であれば図3、活格型であれば図4となる。

【図3】対格型

	主語	目的語
他動詞	$\phi$	$\phi$ / ヲ
非能格自動詞	$\phi$	
非対格自動詞	$\phi$	

【図4】活格型

	主語	目的語
他動詞	$\phi$	$\phi$ / ヲ
非能格自動詞	$\phi$	
非対格自動詞	$\phi$ / ヲ	

つまり平安期における非対格自動詞の主語が「ヲ」でマークされていれば活格型となり、「ヲ」でマークされていなければ、現代日本語同様、対格型となるわけである。竹内（2012）の理論は、主語や目的語の「 $\phi$ 」にA、Bの2種を認め、述語との距離によって、Aの「 $\phi$ 」が他動詞主語と非能格自動詞主語、Bの「 $\phi$ 」が非対格自動詞主語と他動詞目的語になっているという主張である。しかし目的語表示の助詞として「ヲ」が存在しているわけであり、これを切り離して「 $\phi$ 」における名詞の振る舞いにのみ注目して、平安期の中央語に活格性を認めるという理論には問題があると言わざるをえない<sup>2)</sup>。

今回の資料の中で非対格自動詞文において「ヲ」が用いられている例は以下の②②～②④である<sup>3)</sup>。

- ②② 例の心もとなき筋をのみあれば、「なにか、三つとのたまひし指、一つは折りあへぬほどに、過ぐめるものを」と言へば（『蜻蛉日記』 p. 346）
- ②③ 「などかは、はかなき返事をだに絶えてなき」と帯刀にのたまへば  
（『落窪物語』 p. 28）
- ②④ 「しいて、この傘をさしかくして、顔を隠すはなぞ」とて、行き過ぐる



ままに、大傘を引き傾けて、傘につきて屎の上を居たる

(『落窪物語』 p. 62)

②の「筋」は存在主体として認めてもよいであろう。すなわち非対格自動詞主語が「ヲ」でマークされている例となる。③の「返事」は形容詞「なき」に係っているという捉え方が一般的であろう。しかし、歌ではあるが「命だにあらばと頼むあふことを絶えぬといふぞいと心うき」(『落窪物語』 p. 113)のような表現形式も確認でき、「返事」が非対格自動詞「絶ゆ」の主体となる可能性も捨てきれないため、ここでは主語の「ヲ」標示として認めておく<sup>4)</sup>。④の「居る」の存在主体は、文字表記としては示されていないが「少将」である。したがって、「屎の上」は存在場所ということになる。この「ヲ」は非対格自動詞主語をマークしている例とはみなせない。

以上見たように、非対格自動詞主語が「ヲ」でマークされているのは2例のみである。非対格自動詞主語において「 $\phi$ 」は1256例存在するので、「ヲ」の標示率は0.16%となる。もし平安期の中央語が図4のような活格型であったとするなら、非対格自動詞主語における「ヲ」標示率も他動詞目的語における「ヲ」の標示率48.9%に近い数値になるはずであるが、実態は図3の状態であると言えるであろう。したがって平安期(10世紀)の中央語は対格型であると判断される。

#### 4. 述語との距離が意味するもの

前章では格標示という観点からすると平安期の日本語は対格型であることを確認した。主語や目的語と述語との距離は、外項内項という構文的性質に相関するという捉え方には反例が認められ実態に合わなかった。しかしながら、外項と述語との距離が内項と述語との距離より離れる傾向が認められることも事実である。それではこの距離は何に基づいているのであろうか。

##### 4.1 距離の実態

ここでは10世紀の資料における係り受けの実態を確認しておきたい。その様相を考察する上で、隣接、語介在、節介在の3種による分析を試みる。隣接は②③のように無助詞名詞と述語との間に介在する成分がないものである。語介在は②⑦～②⑨のように副詞(形容詞連用形なども副詞として扱う)や

格成分など語レベルの要素が介在するもの、節介在は⑩⑪のように副詞節レベルの要素や引用句が介在するものとする。

- ⑫ さて、二十余日にこの月もなりぬれど、あと絶えたり  
 (『蜻蛉日記』 p. 318)
- ⑬ 四の君、いとうれしと思ひて、日ごろのありさま語る  
 (『落窪物語』 p. 325)
- ⑭ むかし、はかなくて絶えにける仲、なほや忘れざりけむ  
 (『伊勢物語』 p. 134)
- ⑮ おなじ帝、狩いとかしこく好みたまひけり (『大和物語』 p. 385)
- ⑯ かれが申さむこと、院に奏せよ (『大和物語』 p. 367)
- ⑰ 故兵部卿の宮、この女のかかること、まだしかりける時、よばひたまひけり  
 (『大和物語』 p. 331)
- ⑱ 衛門、いかで北の方に知らせばやと思ふ (『落窪物語』 p. 200)

【表1】は、主節における無助詞名詞と述語の係り受けに関して、上記の3種によって分類した結果である。

【表1】	外項		内項	
	他動詞主語	非能格主語	非対格主語	他動詞目的語
隣接	89 ( 26.0%)	72 ( 42.9%)	462 ( 81.6%)	413 ( 83.4%)
語介在	140 ( 40.8%)	78 ( 46.4%)	85 ( 15.0%)	75 ( 15.2%)
節介在	114 ( 33.2%)	18 ( 10.7%)	19 ( 3.4%)	7 ( 1.4%)
合計	343 (100.0%)	168 (100.0%)	566 (100.0%)	495 (100.0%)

内項である非対格自動詞主語と他動詞目的語は同じような振る舞いをしており、その多くは述語と隣接し、節介在は僅少であることがわかる。それに対して外項である他動詞主語と非能格自動詞主語の場合は振る舞いが異なっている。語介在が多いという点は変わりがないが、他動詞主語においては隣接が26.0%、節介在が33.2%と同程度となっており、非能格自動詞主語においては隣接が42.9%、語介在が46.4%と同程度となっている。節介在の割合で考えてみると、同じ外項でも他動詞主語の方が述語との距離が遠い場合が多い。

さて上記のような状況からどのようなことが読み取れるであろうか。確かに外項は内項に比べて述語から離れる傾向にあるということがうかがえる。しかしそれは外項内項の統語的な性格によってもたらされているものではないということは先に確認した。この状態は何に起因しているのであろうか。

#### 4.2 非対格自動詞文主語と述語との距離

他動詞や非能格自動詞は行為性の述語であるため、それらの主語は原則として意志を持つ有生名詞となる。外項が述語から離れる傾向にあるのは、この主語の有生性にあるのではないだろうか。有生名詞は他動詞文や非能格自動詞文の主語にも立つが、非対格自動詞文の主語にも立つ。もし有生性が述語との距離に関わっているとすれば、非対格自動詞主語において有生名詞と無生名詞の振る舞いに違いが見られるはずである。もし有生名詞主語の方が無生名詞主語より述語からの距離が遠い傾向にあるとすれば、それは主語における有生性によるものと理解することができる。

そこで非対格自動詞文における主語を有生名詞、無生名詞にわけて、述語との距離を介在成分の3種によって分類したものが【表2】である。

【表2】	有生名詞	無生名詞
隣接	143 ( 70.8%)	319 ( 87.6%)
語介在	47 ( 23.3%)	38 ( 10.5%)
節介在	12 ( 5.9%)	7 ( 1.9%)
合計	202 (100.0%)	364 (100.0%)

無生名詞は有生名詞より隣接する傾向にあり、有生名詞は無生名詞より語介在と節介在が多いことがわかる。同じ非対格自動詞文でも有生名詞主語のほうが無生名詞主語より述語からの距離が遠い傾向にあるということが言えるであろう。つまり主語の有生性が述語との距離に関わっているということになる。

#### 4.3 引用句から見る主語と述語との距離

前節では、非対格自動詞文において、主語の有生性が述語との距離に関わっていることを確認した。ここでは介在成分としての引用句に注目して、主語の有生性が述語との距離に関係していることを確認したい。

③②③は引用句が主語と他動詞述語との間に介在する例、③④～③⑥は引用句が主語と非対格自動詞述語との間に介在する例である。

- ③② かぐや姫、「何事をか、のたまはむことは、うけたまはらざらむ。変化の者にてはべりけむ身とも知らず、親とこそ思ひたてまつれ」といふ  
(『竹取物語』 p. 22)
- ③③ 聞く人、「いでや、さらずとも、かれらいと心やすしと聞く人なれば、なにか、さわざわざしうかまへたまはずともありなむ」などぞ言ふ  
(『蜻蛉日記』 p. 203)
- ③④ 北の方、「げにわが子ども、あるは夫せし、男子はずろなるに、わがため、はらからのためする、いとありがたし」と、やうやう思ひなるほどに  
(『落窪物語』 p. 299)
- ③⑤ 北の方、落窪のなきをねたういみじう、「いかで、くやつのためにまがまがしき気せむ」と惑ひたまふ  
(『落窪物語』 p. 169)
- ③⑥ 女、「かく隠れもなき所に、人もこそ来れ、いかにせむ」と、胸つぶれて、いとおそろし  
(『落窪物語』 p. 68)

上記の例からは、他動詞文であれ、非対格自動詞文であれ、主語と述語との間の介在成分として比較的長い引用句が許容されることがわかる。これら③②～③⑥の共通点として、主語が有生名詞になっていることがあげられる。③②～③⑥の引用句は実際の発話内容や心内語であるため、主語は有生名詞となる必要がある。他動詞文や非対格自動詞文において、主語と述語との間に長い引用句が介在できるのは、主語の有生性によるものであると考えられる。

#### 4.4 無助詞名詞と述語との距離が遠くなる要因

本章では、外項内項と述語との距離を改めて確認した。実態として外項の方が内項より述語からの距離が遠くなる傾向があることは確かであった。しかし同じ内項においても述語との距離に違いが認められた。それは非対格自動詞文の主語において、総じて有生名詞主語が無生名詞主語より述語からの距離が遠くなるというものであった。これは外項である他動詞主語、非能格自動詞主語が有生名詞であり、総じて述語との距離が遠くなるということと軌を一にする。つまり主語が有生名詞の場合には述語との距離が遠くなる傾

向にあるということになる。また非対格自動詞文において、他動詞文と同様、比較的長い引用句を介在成分として許容できるのは、主語が有生名詞の場合であった。

以上のことから、有生名詞主語の場合には、述語との距離が遠くなるものが許容されるものと考えられる。無助詞名詞と述語との距離が離れるのは、主語の有生性に関わる言語現象だと言えるであろう。

## 5. まとめ

本稿では、無助詞名詞と述語との間の介在成分に質的な違いがあるということによって、平安期の日本語が格活性を有しているという竹内（2012）の主張に対して検証をおこなった。結果としては介在成分に質的な違いは見られず、また格標示という点からも平安期の中央語は対格型であると結論付けることができた。

また実態として外項が内項より述語との距離が離れるという言語現象が見られるが、それは主語の有生性によるものであると考えられた。同じ内項である非対格自動詞主語において、有生名詞主語の方が無生名詞主語よりも述語との距離が遠くなることも、この主語の有生性に基づくものであった。

角田（2009）によれば、名詞には、1人称>2人称>3人称>固有名詞（親族名詞）>人間名詞>動物名詞>無生物名詞という階層が存在し（「シルバースティーンの名詞句階層」）、階層が高い方（左の方）の名詞は関心度が高く、話題になりやすいと述べている（pp. 41～42）。有生名詞が述語との距離を遠く保てるのは、有生名詞が名詞の中で階層が高く、文中において話題になりやすいという性質を持っているからであろう。話題になりやすいということは、そこに視点が定まったまま情報伝達がなされるので、無助詞であっても情報伝達上の支障はなく、ある程度の介在成分が許容されるものと思われる。このような背景が有生名詞において存在することによって、有生名詞主語と述語との距離が遠くなる傾向が実態として言語現象に表れていると結論付けたい。

## 注

- 1) 本稿の引用は、国立国語研究所（2016）『日本語歴史コーパス 平安時代編』（短単位データ1.1/長単位データ1.1）[https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/chj/heian.html](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/chj/heian.html)

によった。竹内 (2012) に合わせて成立年代10世紀ということで、調査対象は『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『落窪物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』とした。

- 2) ただし竹内 (2008) において、「上代資料から読み取れる格助詞ヲの標示のあり方は、格助詞ヲが他動詞文の目的語だけを標示する形式へと推移しつつある過渡的な状態を示していると考えられる」とすでに述べており、平安期の中央語が格標示から見てすでに対格型になっていることは認めているものと思われる。そのような状況においてもなお、外項内項と述語との距離に活格性の痕跡を認めようとしていたわけであるが、反例が存在する以上、活格性を認めるわけにはいかないであろう。
- 3) 因みに11世紀以降の平安期における非対格自動詞主語が「ヲ」で表示されていると思われる例は以下のとおりである。
  - ① いただきには、うちまきを雪のやうに降りかかり、おしほみたる衣のいかに見ぐるしかりけむと、後にぞをかしき (『紫式部日記』 p. 134)
  - ② 他の国にも、事移り世の中定まらぬをりは深き山に跡を絶えたる人だにも (『源氏物語』 p. 283)
  - ③ 人のたはやすく通ふまじからむところに、跡を絶えて籠り居なむと思ひはべるなり (『堤中納言物語』 p. 503)
  - ④ 「道長が家より帝・后立ちたまふべきものならば、この矢あたれ」と仰せらるるに、同じものを中心にはあたるものかは (『大鏡』 p. 325)
- 4) 査読の方から、平安期において「返事」に対応する述語は一般的に「書く、書かず、す、せず、あり、なし」であり、「絶ゆ」とは共起しないのご指摘をいただいた。確かに「返事絶ゆ」は存在しないが、「～を絶ゆ」という表現形式が存在するため、ここでは「返事」を非対格自動詞主語として認めた。

#### 【参考文献】

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 菊田千春 (2012) 「上代日本語のガ格について——格活説の問題点」『同志社大学英語英文学研究』 89
- 竹内史郎 (2008) 「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」『国語と国文学』 85-4
- 竹内史郎 (2012) 「古代日本語の主節の無助詞名詞句——活格性との関わりから——」『第1回日本語学コーパスワークショップ予稿集』 国立国語研究所

[https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop\\_no1\\_papers/JCLWorkshop2012\\_04.pdf](https://www.ninjal.ac.jp/event/specialists/project-meeting/files/JCLWorkshop_no1_papers/JCLWorkshop2012_04.pdf)

角田太作 (2009)『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』くろしお出版

柳田優子 (2007)「上代語の能格性について」『日本語の主文現象——統語構造とモダリティ』ひつじ書房

柳田優子 (2014)「言語類型論からみた上代日本語の主語表示・目的語表示——「ガ」と「ヲ」と「ゼロ」表示について——」『日本語学』33-14

Yanagida, Yuko and Jhon Whitman (2009) "Alignment and Word order in Old Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 18

【付記】本稿は、第8回韓国日本研究総連合会国際学術大会兼第56回韓国日本文化学会国際学術大会（於啓明大学校2019年4月20日）において発表した内容に対して加筆修正をしたものです。席上有益なコメントをしてくださった方々にこの場をお借りして感謝申し上げます。また査読の方より有益なご指摘をいただきました。重ねて感謝申し上げます。なお本研究は、JSPS科研費「平安期鎌倉期の日本語における無助詞名詞句の運用システム」課題番号17K02791の助成を受けています。

